

ともろう通信



No.22

2018年4月発行

ともろう
共朗生 — 共に朗らかに生きていきたい!

★ともろう通信は、NPO 法人男女共同参画こしがやともろうの機関誌です。
事業：①男女共同参画関係施設受託事業②男女共同参画の推進を担う人材養成事業
③情報提供、調査研究事業④自立支援・相談事業⑤子どものための自立支援事業



新年度のスタートにあたって

真新しいランドセルを背負う1年生を優しくサポートしながら通学する上級生、又、通学中の子どもたちを見守る地域の方達。

新年度は新入生も新社会人も、少しの不安と緊張を持ちつつ期待と希望が入り混じった心新たなスタートですね。

越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」で先日、担当課である人権・男女共同参画推進課の中村課長、綿引副課長、登録団体、男女共同参画こしがやともろう、「ほっと越谷」職員が一堂に会し、登録団体会議が開催されました。会場は温かい雰囲気の中、議事が進められ改めて登録団体・市民の皆様と共に事業が進められること、力強く、思いました。会議後、早速、七夕フェスタの準備に向けて実行委員会が開催され今年度の協働事業がスタートしました。

こしがやともろうは、今年11月に設立10周年を迎えます。男女共同参画社会の推進を掲げ、翌年には越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」を受託。2回の更新を経て今日まで来られたのも会員の皆様を始め登録団体・市民の皆様のご支援・ご指導・ご協力に支えられてのことと深く感謝申し上げます。

「ほっと越谷」は職員がチームワークでしっかりと事業に取り組んでいます。こしがやともろうは「ほっと越谷」の指定管理者として基盤を固めていくため、会員の皆様と共に自主事業を進めていきたいと思っております。今後、設立10周年記念事業を予定しております。皆様からのアイデア、ご意見等をお待ち申し上げます。

平成30年 4月

認定 NPO 法人男女共同参画こしがやともろう 代表理事 駒崎 美佐子

平成 29 年度事業「ゆったりカフェ」報告

4月 認定 NPO 法人男女共同参画こしがやともろう理事 坂本 雅子

平成 29 年度事業「生きづらさを抱えた女性サポート事業（愛の詩基金助成）」《ほっと一息つきませんか～「ゆったりカフェにどぞ」》を、7月29日（土）、8月5日（土）、8月26日（土）と全三回終了。その後、参加した人たちからこの事業を継続してほしいとの声が寄せられた。

このことに応えてく「ゆったりカフェ」にどぞ> として、29年度末まで月一回、計三回継続することになった。1月13日（土）、2月10日（土）、3月24日（土）、RJ対話の会の講師・南光智子さんにキーパーを引き続き依頼した。

内容は、トーキング・サークルの四つの約束、①互いを尊重する、②相手の話をよく聞く、③相手を非難しない、④発言しなくてもよい、に基づいて対話した。トーキングピースを持つ人だけが話し、他の人は聞いている。円座の中でははじめは戸惑っていた人も、話す言葉に耳を傾けているうちに、トーキングピースを持つとその人の言葉で語り始めた。休憩時は、お茶とお菓子もあり和やかに会話が交わされた。

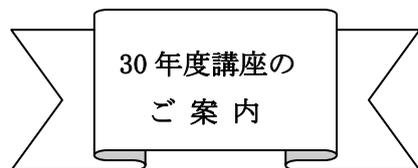
南光さんは「1ラウンドが終わると、みなさんの顔が穏やかになりますね」と話された。

■ スタッフの振り返りの中で、手応えとして話されたこと

- ・ 人の出会いや繋がりを求めている人が多数いる。
- ・ 安心と安全な場で話をし、話を聞きたいと願っている人がいると実感した。
- ・ 「また来ます」「また来たいです」と伝えてくれた人の気持ちを大切にしたい。

■ 課題

- ・ チラシの内容の検討
- ・ 「ともろう」としての方向性の確認
- ・ 継続することの中での問題点の洗い出し



ほっと一息つきませんか 「ゆったりカフェ」にどぞ

* 4月28日（土） * 5月20日（日） * 6月16日（土）
* 7月28日（土） * 8月25日（土） * 9月22日（土）
* 10月27日（土） * 11月24日（土） * 12月22日（土）
13:30～15:00



参加費 100円（茶菓子代）
対象 女性
場所 越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」
主催 認定特定非営利活動法人 男女共同参画こしがやともろう
協力 特定非営利活動法人 RJ対話の会
問い合わせ 駒崎 048-976-0738
坂本 048-976-4905
Eメール tomorou@hot-koshigaya.jp

「ともろうカフェ」&「ひだまり広場」～東日本大震災を忘れない～ で語り合いました

認定 NPO 法人男女共同参画こしがやともろう理事 山口洋子

平成30年3月18(日)、ほっと越谷の登録団体「ひだまり広場」と共催で、【東日本大震災を忘れない～地域の交流について一緒に考えてみませんか～】と題して「ともろうカフェ」&「ひだまり広場」を開催しました。

震災以降、各地域で住民と避難してこられた方との交流の場が持たれてきましたが、避難して来られた方が、地域で孤立せず、安心して生活していくために、コミュニケーションができる人と人との関係や地域の交流について考えてみよう企画したものです。

黙祷の後、浅野富美枝さんの仙台での活動の話、県立大学生の今野さんの卒業研究の話、越谷市や埼玉県に避難して来られた方の話、一步会の方の話をお聴きし、講師を含めて参加者44人が5つに分かれたテーブルを囲んで、自由に語り合いました。

被災者の方の話を直接聴いたのは始めてという方もいらして、7年たった今も東日本大震災後の厳しい現実があること、避難して来られた方が地域に馴染んで生活していけることについて、安心して話の出来る場の大切さなどについて、一緒に考えることが出来ました。

アンケートでは「浅野先生の女性視点のものの考え方が勉強になりました。」「今野さんはじめ若い方の取り組みに励まされ、希望を感じました。」との感想が寄せられました。

日 時 平成30年 3月18日(日) 13:30～16:30

場 所 越谷市男女共同参画支援センター「ほっと越谷」 セミナールームA・B

13:30 開会

13:30～13:35 主催者挨拶

黙祷

13:35～14:50 浅野富美枝さんのお話し「仙台での活動」・質疑応答

14:50～15:00 休憩

15:00～16:00 ① 今野晴香さんのお話し

卒業研究「東日本大震災の被災者を対象とするサロンの形成過程」

② 「ひだまり広場」参加者のお話 地域の方のお話

質疑応答

16:00～16:30 テーブルごとのフリートーク

16:30 閉会



仙台での支援活動など 浅野富美枝さん

(吉川市在住 元宮城学院女子大学教授 (家族社会学)。NPO 法人イコールネット仙台理事)

2011年3月11日、当時、浅野さんが勤務していた宮城学院女子大学も被災し、卒業式、入学式もままならないまま、5月の連休明けから授業を再開。そのような中で、浅野さんはNPO法人イコールネット仙台の宗片恵美子代表と被災者の支援活動を始めました。

女性の視点を生かした避難所運営に始まり、各人の知識と経験を生かした友人・知人のネットワーク、多様な支援、協働、締めくくりに釜石小学校校歌の紹介まで、具体的事例とともにお話しいただきました。



<安全・安心の避難所づくり>

1 避難所に外部の者が立ち入ることは容易ではない。男女共同参画関連の委員会・審議会等委員を引き受けている自治体の一つ登米市の避難所お見舞い訪問が、被災女性支援活動の土台となった。お見舞い訪問という形で避難所の女性たちに支援物資を届けるかわら、避難所生活で困っていることを聞かせてもらい、一人ひとりに見合ったプル型支援が被災者のニーズに沿った多様な支援につながった。

2 間仕切り、更衣室、授乳室、トイレ、男性が支援物資・生理用品の配布担当、などなど女性の視点からの様々な問題について、女性が運営に参画しているかどうかで、対応が図られているところとそうでないところの違いがあった。

女性職員が運営に携わり、洗面所に生理用品や基礎化粧品が並べられ、誰でも使えるように配慮されていた避難所では、MFT（体が男性でところが女性）の避難者の要望を取り入れて広々とした更衣室を設置したり、姿見を置いたり、入浴への配慮がなされた。

<多様な支援、協働>

3 登米市で2011年4月に施行された男女共同参画推進条例の制定に2009年から協力していた。避難所お見舞い訪問には市の担当職員のほか、条例策定委員だった須藤明美さんも同行し、避難女性の生の声を聞き、それに応えるために市民委員の有志によって「えがおねっと」が結成された。

化粧品メーカーの協力で避難所の女性にマッサージやメイクアップをすることに最初は「化粧品のような贅沢品は必要ない」と言った男性の代表者が、女性が明るくなったことに驚き「あんなに笑顔の母ちゃんを初めてみた、また来て欲しい」と変わった。

<受援力>

4 「避難所で 100 人に 1 台の洗濯機では間に合わない」「下着を替えることもできない」という声にイコールネット仙台はせんだい男女共同参画財団と協力して洗濯ボランティア活動を始めた。最初の頃、女性たちは家族の洗濯物は出しても、自身のプライバシーをさらけ出すことになる自分の汚れた下着は、同性であっても出してくれなかった。幾度も足を運び、会話し、顔見知りになって信頼関係ができてくると漸く自分の下着を預けてくれるようになった。一人ひとりにみあった支援は支援する側と支援を受け入れる側の協働の営みである。

<経済的自立>

5 支援物資を受け取った女性の「今、自分の身に着けている物はすべて支援物資としていただいたもの。ありがたいけれど情けない。何か、自分の稼いだお金で買ったものを身に着きたい」との声に、小物づくりの講習会・手づくの品の展示販売、産直市など、わずかでも被災女性の収入になる支援が考えられた。

<日頃からの取り組み、ネットワーク>

- 6 やはたえつこさん 看護師の資格を持ち、助産師としてリプロダクティブ・ヘルツ/ライツ:性と生殖に関して実践的に学び、「女性のための離婚ホットライン」の活動に携わり、並行してDV被害女性支援の活動にも関わるようになった。1992年にはDVと離婚についてグループで話し合う場「しんこきゅうタイム」をスタートさせ、震災以降、登米市、宮城県と連携して、県内各地で開催。その間、1998年にシェルターの運営を開始し、翌1999年に「ハーティ仙台」を設立。被災地では被災後も深刻なDV事件が多発しており、被災女性支援と密接に結びついている。さらに、やはたさんは「みやぎジョネット」を設立し、被災地と全国の女性たちとをつなぐ活動に取り組んでいる。
- 7 伊藤仟佐子さん 1999年、娘が二歳半のとき、夫の転勤で仙台にきた伊藤さん。あるとき怒って子どもを外に出したら、声が聞こえなくなり、不安になって探したがいない。警察に届けようと戻ってきたら、隣の家から、子どもの笑い声が聞こえる。隣のおばあちゃんが遊んでくれておやつを食べさせてくれていた。転居以前から孤立の中で子育てに苦しんできた伊藤さんは、子どもではなく自分が助けられたと言う。情報誌「子連れママの気晴らしマップ」にかかわり、いろいろな人たちとのネットワークができ、2003年「NPO法人せんだいファミリーサポート・ネットワーク」を設立し、「仙台市子育てふれあいプラザのびすく仙台」の指定管理者となっている。伊藤さんが館長をしている、のびすくは建物に被害がなかったこともあり、震災4日後には開館し、不安な日々を過ごしていた沢山の親子を受け入れた。



< ピアサポート >

- 8 震災に触れた授業後の宮城学院女子大生のコメントシートに「避難所にいた時に、支援物資の中につけ爪があった。被災前によくつけていたので「ほしい」と思ったが口には出せなかった。仕分けしていた職員がゴミ袋に放り捨てたのを見て、つけ爪を欲しいと思った自分が捨てられたと感じた」とあった。

「MDGガールズ・プロジェクト」宮城学院女子大学（M）とドレメファッション芸術専門学校（D）の学生が、かわいい物資（ポーチ、ストラップ、ネイル、髪留め e t c）を集め、仕分けし、プレゼント用にラッピングして、被災地に持って行き、ガールズトークを行った。自分たちが大切にされていると感じて嬉しかったと徐々に元気になる高校生を見て、学生も自分にできることがあったと自信を持ち、双方のエンパワメントにつながった。

< Personal is Political >

パーソナル・イズ・ポリティカルとは、個人的なことは政治的・社会的なことという意味で、地域活動に携わっている女性たちの合言葉になっている。

< 釜石小学校校歌 作詞：井上ひさし 作曲：宇野誠一郎 >

いきいき生きる いきいき生きる ひとりでたって まっすぐ生きる
困ったときは 目をあげて 星を目あてに まっすぐ生きる
息あるうちは いきいき生きる

はっきり話す はっきり話す びくびくせずに はっきり話す
困ったときは あわてずに 人間について よく考える
考えたなら はっきり話す

しっかりつかむ しっかりつかむ まことの知恵を しっかりつかむ
困ったときは 手を出して ともだちの手をしっかりとつかむ
手と手をつないで しっかり生きる



震災関連記事



浅野さんの著書・震災関連図書
浅野さんたちの活動を伝える朝日新聞連載
「てんでんこ」

卒業研究

「東日本大震災の被災者を対象とするサロンの形成過程」 今野晴香さん

(埼玉県立大学 保健医療福祉学部社会福祉子ども学科 社会福祉学専攻 4年

前ひだまり広場代表)



2011年3月11日、今野晴香さんは宮城県東松島市の中学校3年生で、卒業式の前日でした。祖父母や曾祖母を津波で亡くし、自宅の1階部分は浸水し大規模半壊の状態でした。石巻高校を卒業し、2014年4月に埼玉県立大学に入学。「ひだまり広場」に参加し、3年生の時に代表を務めました。

ひだまり広場は学生ボランティア支援サークル「Solutions ソレイションズ」の学生が中心となって運営する「東日本大震災によって被災し、埼玉県内に避難・移住した方と、元々埼玉県内にお住まいの方との交流を目的とした場」で月1回、ほっと越谷で開かれています。

今野さんは、この4月から県内の特別養護老人ホームで介護職として勤務していますが、ひだまり広場に参加するようになった理由と卒業研究の目的を次のように語り、聞き取り調査を行った卒業研究について、研究の背景から、目的、研究方法、調査項目、結果、考察、結論まで、丁寧にまとめられた資料をもとにお話しいただきました。

「ひだまり広場」を運営する「Solutions」に所属したのは、自らが被災し、被災地にいながら高校時代に何もできなかったという思いからでした。大学の外に目を向けて、様々な方と関わりたいと思っていたところ、この「ひだまり広場」の活動を知りました。福祉の道を志すきっかけになったのも、ボランティアを始めるきっかけになったのも東日本大震災だったため、参加してみようと思いました。

ひだまり広場に参加していく中で、予期せぬ事態により地域に入ってきた避難者が、その地域で生活していくには様々な苦労や困難があるのだと知り、避難者と地域住民の関わりに関心を持つようになりました。そこで、避難されてきた方が、そのまま居住するにしろ、また新たな地域に移住するにしても、安心して避難先の地域で生活していくためにはどのような支援が必要なのかと考えるようになりました。

このような経緯から、広域避難者を対象としたサロン（いわゆる交流会）の形成プロセスに着目しました。広域避難者がサロンを設立する場合と、元々埼玉県に在住する支援者がサロンを設立する過程において、それぞれの困難や課題を明らかにし、広域避難者を対象とするサロンの形成に対する支援には今後どのような対策を講じる必要があるのか検討することを目的としました。

<研究の背景>

- ・東日本大震災・福島第一原子力発電所事故から6年半2017年9月現在も3万5千人を超える広域避難者がいて、埼玉県内でも3783人の広域避難者が生活している(2017年10月1日現在、岩手・宮城・福島の3県)。
- ・避難生活が長期化し、**避難者の心身のケア**が重視されるようになってくる中で、埼玉県内でも約30か所開催されている「**サロン(いわゆる交流会)**」に着目した。



<研究目的>

- ①避難者を対象とする**サロンの形成過程**について明らかにする。
- ②**サロン設立における課題**を見出し、今後必要とされる方策を提案する。

<研究方法>

- ・埼玉県内で避難者を対象とするサロンの設立者4人(避難者2人、市民2人)と設立協力者(県立施設職員)1人に聞き取り調査を中心に調査。



<結果>

- 1 サロンの設立過程では、リーダー(設立者が現れ、運営協力者に声をかける)の存在があり、資源の調達(資金の調達、サロン開催場所の確保)を行い、避難者の所在の把握とサロンの広報活動により、サロンを開催し、運営している。
- 2 サロン設立過程における特徴(設立理由、対象者等)は設立者が避難者の場合と支援者の場合で異なるが、課題として避難者の所在把握が困難という点は共通していた。
 - ・個人情報の問題のため、自治体から避難者情報の公開はない。
 - ・行政と民間の連携ができていない。双方の働きかけが少ない。行政と民間を繋ぐ柔軟な存在の欠如

<考察 避難者の所在把握 1 避難者自身のネットワーク>

- ・団地内自治会の主催で開かれた歓迎会で他の避難者と知り合う。
- ・家族とともに避難してきたため連絡先を把握している。

(課題)

- ・団地等の集合住宅に居住しておらず、他の避難者と顔を合わせる機会がない避難者が多い。
- ・母子のみで避難ってきて、知り合いがいない避難者も多数。
- ・避難指示区域からの避難者と軋轢が生じるのを避けるため、同じ避難者とも接触を避ける自主避難者がいる。

「避難者と」一括りにせず、それぞれの立場(母子避難や自主避難者等)に合う支援を実施する。

→そのために、子育て支援団体や法律の専門家など様々な団体の支援が必要である。

<考察 避難者の所在把握 2 支援者による調査活動>

- ・福島県の協力を得て、避難者に対するニーズ調査を実施。
- ・埼玉県内の二次避難所に足を運び、避難者と交流した。
- ・サロンの広報活動を行う中で避難者と繋がった。
- ・避難者向けのイベントを開催し、そこで避難者の所在を把握した。

(課題)

- ・避難者の生活拠点は流動的なため、避難所での交流だけでは今後の支援に繋がりにくい。
- ・民間団体の調査に対して個人情報を提供する不安感があるのではないか。

行政によるコミュニティ構築支援の主導

<結論>

①サロンの形成過程には「リーダーの存在」「資源調達」「広報（避難者の所在把握）」「サロン運営」の4つの段階があり、

その中でも

「リーダーとなる存在がいること」「避難者の所在把握ができていること」が重要な条件。

②災害時は立場の近い避難者同士が集まりやすい環境を整える。

→問題意識に気づき、リーダーとなる存在を生みやすくなる。

→また、悩みを抱えて孤立する避難者の減少につながる。

③今回の事例では「行政」と「被災者団体」が目立っていたが、社会福祉協議会や市民団体といった様々な団体・個人での広域避難を想定した役割分担が必要である。

最後に

- ・被災者への支援は、被災地で行われるものだと思っていた。
- ・しかし、広域避難が必要な場合は全国各地で、広域避難者への支援が必要になる。

決して無関係ではない！

被災地に行かなくても、できることがある。

災害が起こる前から考えられることがある。



大学祭の Solutions ブースの
ひだまり広場の掲示



ひだまり広場で作った小物

フリートーク

岩手県、福島県から避難して来られた方々、地域の方々から、お話を伺い、その後、各テーブルで自由に話し合いました。



閉会



現ひだまり広場代表 市川佳奈さん

休憩時間

陸前高田市「めぐ海工房」のがんづき



次の図書は、ほっと越谷の震災文庫にあります。

「みやぎ3・11「人間の復興」を担う女性たち 戦後史に探る力の源泉」浅野富美枝著
(生活思想社)

「聞き取り集 40人の女性たちが語る東日本大震災」NPO法人イコールネット仙台

「女たちが動く 東日本大震災と男女共同参画視点の支援」

浅野富美枝共著・みやぎの女性支援を記録する会編著 (生活思想社)

第 62 回国連女性地位委員会（CSW62）に参加して

4 月 認定 NPO 法人男女共同参画こしがやともろう理事 青木 玲子

3 月 12 日から 3 月 23 日までニューヨークで開催された CSW(国連女性の地位委員会)に JAWW(日本女性監視機構)の事務局長として参加しました。CSW62 の優先テーマは「農山漁業におけるジェンダー平等と女性と少女のエンパワーメント」でした。

◆ サイドイベント

今年も、国連日本政府代表部と NGO 三団体 (JAWW, 国際婦人年連絡会, 国連 NGO 国内女性委員会) の共催で国連内でのサイドイベント「農山漁村地域の女性と少女のエンパワーメントのための活動」を開催しました。サイドイベントでは、スピーカーに日本、タンザニア、ネパールの取り組み事例、国際連合食糧農業機関からは、グローバルな観点でお話をいただきました。

日本からは、農林水産省の「農業女子」プロジェクトに参加して、山形県の果物を使ってドライフルーツの生産加工で起業した結城こずえさんが参加しました。「農業女子」プロジェクトには、現在日本全国で 647 人のメンバーがいるそうです。頼もしいです。女性が農村社会の担い手として、農業労働者として占める割合は、43%です。しかし、高齢化も進み、意思決定への参画率は低く、農業委員などの女性の比率は 7-8% 止まりです。農山漁業は世界の基盤的な産業であり、大規模な農業国もありますが、多くの地域では小規模でインフォーマルでもあり、女性も重労働を担っています。

女性の生活向上、人権確立は世界共通の課題です。世界的な共通課題としては、①女性の生活水準(労働賃金、福祉)、②土地の所有権、③女性に対する暴力や有害な行為、④食料の安全保障と栄養、⑤教育、⑥性とリプロダクティブ・ヘルス・ライツの分野の取組です。

越谷市も中核都市と言っても農業は大切な地域産業です。越谷で農業に従事する女性の現状を課題とするのも忘れてはならないと思います。家族協定など、条例や行動計画策定の時に話題となりましたが、現状を統計的に残して継続して統計の数字を分析することが求められますね。



◆レビューテーマ

CSW62 のもう一つのテーマは、メディア・ICT(情報・コミュニティ技術)への女性のアクセスでした。ICT の関連では、「# ME TOO」のキーワードのあるイベントに参加者が溢れ、ICT の活用の事例、ビッグデータの活用の活用報告がアフリカ諸国のパネルで熱心に議論されていました。また、国連からの情報発信は、ますます多様なメディアが使用されています。



会議概要については、UN Women のサイトから多様なメディアにアクセスできます。

<http://www.unwomen.org/en/news/in-focus/csw>



国連は、「NO ONE BEHIND(だれも取り残さない)」というスローガンを掲げています。しかし誰が取り残されるのか統計や ICT の活用で明らかにしてもらいたいものです。

◆ 2週間の滞在

今年はいつもよりは長く約二週間滞在しましたが、寒かったです。日本からの桜の便りをテレビで見ながら、朝早く冬支度で国連に通う毎日でした。丁度ホテルがマンハッタンに近く、大きなコーヒーカップと新聞を片手に大きなビルの中に大勢の人たちが急ぎ足で吸い込まれて行く活気ある風景に見とれていました。



毎年朝ごはんを食べた小さなパンケーキ屋さんが潰れてがっかり、あっちもこっちも一年で潰れているお店があり、日本の食材を売るお店が意外と残って繁盛していたり、高層ビルの谷間の小さなお店の人たちはどうしているのだろうと馴染みになっていた顔を思い出していました。テレビをつければ、トランプ大統領の顔ばかり、同時に高校生の銃規制に対するデモは、各地で広がって小さいデモも良く報道されていました。

日本に帰ってワシントンでの大行進を観ましたが、ちょっと灯を見る思い出となりました。

こしがやともろうからのお知らせ



平成 30 年度総会

- ◇ 日時 5月28日(月) 午前10時より
- ◇ 場所 越谷市市民活動支援センター 活動室B
(越谷駅東口 越谷ツインシティB 5階)

詳細は追ってご案内致します

こしがやともろうかのおねがい!

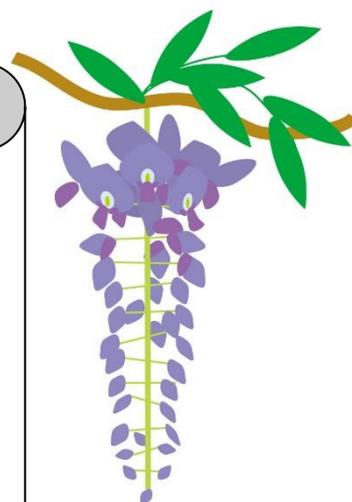
★正・賛助会員になって活動を支えてください!

正会員 年額 10,000円
賛助会員 年額 一口 2,000円

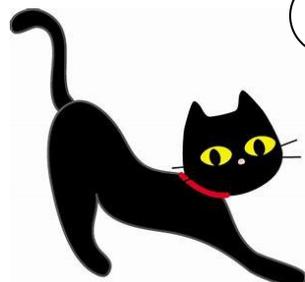
●寄附のみも受け付けております

男女共同参画こしがやともろうは認定NPO法人です
ご寄付は税金の控除を受けることができます

郵便振替口座 00120-1-447817
加入者名 NPO法人男女共同参画 こしがやともろう



ホームページを
開設しました。
皆様のアクセスを
お待ちしております。



(問い合わせ・申込先)

認定NPO法人
男女共同参画こしがやともろう
〒343-0026
埼玉県越谷市北越谷2-21-8
電話/FAX 048-962-3963
Eメール tomorou@hot-koshigaya.jp

<https://koshigaya-tomorou.or.jp/>